



野鳥を追いかけて

中頭病院 外科
平安山 英義

これまでゴルフを趣味として過ごしてきたが、若腰を痛めてからはもうダマシが効かなくなり、一線を退いた。あの当時は腰の痛みと共に左足がちぎれるように、痙攣で痛くなり、どんな体勢をしても痛みが取れず、ついには麻酔科の佐藤公淑先生へ持続硬膜外麻酔をして頂き、この世に復活することが出来た。以来好きなゴルフと一大決心をして決別と成った。それから野鳥を追いかける生活が始まった。ゴルフも朝の早起きが必要であるが野鳥の方もまた暗いうちからの駆け出しが必要と知った。どこに珍鳥が出たという情報が出ると、早起き三文の徳と自称して、時には午前5時頃には家を飛び出して現場に向かうことも多い。鳥は気まぐれで、その場にほんのひとときしか居ないことも多い。だから新聞や友人のツテなどでどこどこに珍鳥が出たという情報があれば、その時には急ぐ必要がある。また、鳥たちの渡りのシーズンがある。春は3月～5月（南から北への移動）であり、秋は9～11月（北から南への越冬のための大移動）である。この頃になると何処かに必ず珍しい鳥が来ていると信じて家を出るのであるが、なかなか見つからず（実際にはいないのかも知れないが）信じて探鳥している）、実入りの無い状態で帰ることが多い。その時はどうしてかたちまち女房にバレてしまう。顔色を見るなり、すぐさま鳥はいなかったの？と聞かれる。そんな時は大儀そうに、あちこち捜したが見あたらなかったと自己慰め的な言葉でかわす。

日本に来る珍鳥の7割強はこの琉球列島に来ているというから言わば珍鳥の飛来地であるはずと念じて励んでいる。能登半島の沖合約

46kmにある「へぐら島」は周囲が6km程度の小さな離れ島であるが5月頃の鳥の移動の時期にはたくさんの野鳥（167余種）が渡って来ると言う。本土の大抵の探鳥家に聞けば、「ああ、行ったことがある」という位有名な所であるようだ。私も何時かはと思っているがなかなかその機会が無い。この沖縄もあながち見捨てたものではなく、何処かに何らかの珍鳥が通り過ぎているものと思う。探鳥する範囲が余りにも広く、この為人に気づかれぬままに通り過ぎているものと思っている。県野鳥の会の重臣である嵩原建二氏（現；県立名護特別支援学校、教頭）によれば、うるま市ではヤイロチョウの死んだ個体が発見されていると言ひ、このヤイロチョウは県内ではまだ撮影されていないが、とにかく知らないうちに通過しているものと考えられた。またミツユビカワセミ（くちばしがアカショウビンのように赤い）も2～3年前南部で保護された記録もあり、普段目にすることはないが何らかの珍鳥がこの琉球列島を知らないうちに通過していると信じている。

さて野鳥は大きく分けて夏鳥と冬鳥に大別している。夏鳥はいわゆるリュウキュウアカショウビンやベニアジサシなどのアジサシ類、それに尾の長く、愛くるしいブルーのアイリングをしたサンコウチョウが主であるが、他にはホトトギスやカッコウなども来る。もちろん前述のヤイロチョウやコマドリ等も夏鳥として本土には飛来している。

冬鳥は数は大変多く、クイナやカモ類やオシドリ、マガン、ヒシクイ、ハクチョウ、ツル類、シギ類、サシバやハヤブサなどの猛禽類など種類といい、数も多い。何処に来るのかは未定で一般的には田園地帯や沼地や池・ダム等に飛来することが多い。沖縄本島では豊見城市の、通称三角池や金武町の田園部、羽地や我部祖河の田園地帯、喜如嘉、奥間の田園地帯などが多い。また、糸満市の米須海岸周辺も多くのカモ類やシギ類が飛来している。

撮影場所が田園地帯となればどうしてもそこで働く農家の方々との軋轢が生じることは避け

られない。私は現地で働く農家の人々を最優先に考え、邪魔をしないように色々配慮しているつもりであるが、逆に農家の方々も、その場で待ってくれたり、迂回をしてくれたりと逆配慮されていることも多く、大変感謝している。働く農家がいる、そこにエサ場があり、そして鳥が来てくれるという一連の深い関係があるからこそ、野鳥の撮影が出来るのである。

さて、夏鳥と言えば私はまずリュウキュウアカショウビンに期待している。去年は一昨年(2012年)の台風の影響でヤンバルの山野はことごとくやられ、岩の上に根をはっていた樹木はなぎ倒されていて、無残な光景になっていた。果たしてこのような状況でもアカショウビンは来てくれるのか心配していた。飛来時期は4月中旬頃で、ヒュルル、ヒュルルの鳴き声が聞こえたらもう血が騒ぐ。ついに夏は来にけりである。やがてあちこちの山野で鳴き声が聞けるようになるとホットする。鳴き声はおそらく縄張り宣言であろうと思う。この声の聞こえる範囲は私の縄張りだと声高らかに宣言しているものと思われる。やがてツガイが出来て営巣と成るとこの時期は物静かに過ごすことが多い。天敵であるカラスや猛禽類のツミ等、さらには人間に営巣地を知られたくないからであろう。去年は中部地区や名護市近辺で何度も撮影が出来た。以前はヤンバル、いわゆる真のヤンバル3村、すなわち、大宜味村、国頭村、東村であったが一昨年の台風で壊滅的な打撃で営巣地があまり無かった。このためヤンバル通いをして撮影することが殆ど出来なかった。その代わりに中部では去年口笛で呼び込みをしての撮影が出来たこともあった。下手な口笛に同情票が集まったのかは分からないが、下手な口笛が哀願するリュウキュウアカショウビン(以下アカショウビン)の鳴き声に似ていたのではないかと自問しながら呼び掛けた。大抵はこの呼び掛けに反応して、車の中の自分では見えない所にアカショウビンは来ていた。時には高い枝に、時には見えない低い所にと。この口笛でアカショウビン君とうまくコミュニケーションが

取れば最高である。ある時は三脚にカメラをセットして車から降りて口笛を吹いた。すると真正面の木の枝に若いアカショウビンが飛んで来てとまった。帽子をかぶり顔をカメラに着けて隠し、何枚も撮影することが出来た。アカショウビン君は不思議な表情をして親鳥が呼んだのかというような顔をしている。私は相変わらず顔は見せない。やがてコンパクトフラッシュが切れた。口笛は静かに流れている。慌てて車に引返してメモリを交換したがまだ逃げない。別のカメラでも撮影が出来た。幸いにも車が通らなかった。さらに別の日にほとんど同じ所で今度は反対側に向けて口笛を吹いた。この口笛を聞いている人がいれば何と下手なと思われそうであるがアカショウビン君は来てくれた。同様に帽子で顔を隠し、カメラに顔を着けている。枝に止まり周りを見渡しているが逃げる気配が無い。撮影は続いている。通りがかった車が何をしているんだ、と止まり怪訝そうな様子であるが私は振り向かない。F数を上げたり、ISOを100にしたりで撮影条件をいろいろ変えての撮影だ。逆光ではプラス補正もした。車が走り出したと同時にアカショウビン君も逃げた。いつでも撮影がうまくいくとは限らない。ある日の夕方、曲がり角の枝先にアカショウビンがとまっていた。折からの夕日を受けていっそう輝いている。絶好のチャンスと車の中からカメラを構えた途端に逃げられた。アカショウビンはこちら側に逃げてきた。すると登り坂の向う側からバイクがさっそうと現れた。バイクに驚き逃げたものと分かった。このようにしばしば、いざという時に限って「マーフィーの法則」に落胆させられることが多い。こういう時は気を取り直して、更なるチャンスを目指して黙って前に進むよりほかはない。苦労してうまく撮影が出来た時はつい「アカショウビン君、ありがとう」と感謝の気持ちを述べている。いつも撮影が出来るとつい感謝の気持ちでいっぱいだ。

一応、1日3～4回の撮影というノルマを果たすと帰りの我が愛車も何となく軽やかだ。

1500ccの傷だらけの愛車もまさに人馬一体

ならぬ人車一体でずいぶん苦勞ばかりを強いてきた。時にはこんな声も聞こえた。「旦那、今日はからきしツイていない。もうこの辺で帰りましょうや。こんな坂道はあっしには無理でさ。何言うんだ、もう少しじゃないかガンバレ」と、自分と車に言い聞かせてもう何年か？。こんな事で去年はアカショウビンの写真でパソコンの中が真っ赤になるくらい撮影が出来た。

アカショウビンは沖縄を初め、北海道まで渡ってくる夏鳥である。本土に渡るアカショウビンは赤が主体であるが、県内に来る、いわゆるリュウキュウアカショウビンは羽の色が赤紫の光沢があり、赤一色の単調なアカショウビンに比べ数段と美しい。県内には4月中旬に大抵は来て、営巣し、子育てをして9月中旬から10月上旬には南方へ帰って行く。他の夏鳥のサンコウチョウやアジサシ類もそれぞれ南方へ帰って行く。去年は旧知念村の「こまか島」に300羽近いベニアジサシが来ていた。その他にマジジロアジサシ4～5羽、エリグロアジサシが2～3羽、さらに台風7号が宮古・石垣地方に向かったためか、ヒメクロアジサシが1羽来ていて、幸いにも撮影することが出来た。そこからの帰り船に乗るとき、現場で働くアルバイト生が曰く、この鳥たちははるばる遠い南方～オーストラリア辺りから来ていますという説明をしている。何か言い足りないと思い、付け加えた。といのは海水浴客には地元のお客さんのみならず、わざわざ本土からのお客さんも一緒だったからである。私は「これらの鳥たちは言えば沖縄出身です。毎年、はるばる遠方からやって来てはいますがここ沖縄で営巣し、子育てをしてまた南方に帰り、また来年も、その次の年もまた来るでしょう。ぬけるような青空があり、そしてこの澄んだコバルトブルーの海があって、そのなかに飛び交う鳥達がいってこそ南国沖縄の楽園なのです。この楽園がいつまでも続くように中央の鳥の営巣地には入らないように御協力をお願いします」と演説ぶった。去年の暮れ11月に入りベニアジサシは本土でも600羽位(300つがい)が営巣したと聞かされた。これ

も温暖化のせいかな？それとも鳥たちの進化(進歩)か？

所で、アカショウビンの学名はハルシオン・コロマンダ(Halcyon coromanda)である。

ハルシオンと言えば睡眠薬のハルシオンを思い出される方も多いでしょう。で、ハルシオンを辞書で調べると英語の辞書に「カワセミの仲間です冬至の頃に海上に営巣し、波を静め、卵をかえすと信じられた鳥」とされている。この波をも静めるということから、こころの中をも静めるということで睡眠薬にも採用されたのではないかと勘ぐった。

ちなみに、カワセミは中国で宝石の「翡翠(ひすい)」に例えられ、漢字でそのまま「翡翠」と書く。翡翠の「翡ひ」はオスを、「翠すい」はメスを表すと同僚の武島正則先生から教わった。カワセミはその昔、「清流の宝石」と言われていたが、鳥たちもさすがにエサが無ければ生きられない。清流でなくともエサがいればどこにでも現れる。最近ではエサのいる海にも出没するようになってきている…。

(つづく)



呼びかけに笑顔で現れたリュウキュウアカショウビン



U 液の不思議なはたらき

県立南部医療センター
こども医療センター
長田 信洋

最近、風呂に入っていて思うのは、シャンプーの香りがとてもよくなったということ。鈍くなっていた嗅覚を刺激してリッチな気分させてくれる。そのシャンプーの香りについて、大手メーカーの開発秘話を某テレビ番組が取り上げていた。

「香り」に深みを持たせるためには少なくとも 20 種類以上の香りを混ぜ込む必要があるらしい。大手メーカー花王の商品開発部門には、約 1,000 種類の香料の原料が一つ一つビン詰めされて置いてあり、香りの研究、開発に用いられているとのことであった。

企業秘密とされている香りの開発現場を女子レポーターが取材した。数あるシャンプーの中でも花王の「ASIENCE」は、近年売り上げを伸ばしている商品であるが、ヒットの元となった香りには 47 種類の成分が使われているらしい。その「艶やかな香り」を出すために、メーカーはとんでもない「香りの素材」をその中の 1 つにしのび込ませていることを知った。取材したレポーターが、秘密の素材成分を保管してあるビンの蓋をとって嗅いだ時、思わず「うえっ」という顔をしたが、それはなんと「猫のオシッコの匂い」だったのである。

いたずら顔の開発担当者が、「こういっただのを入れないと艶かしい香りは出ないですね」と微笑みながらコメントするのを聞いた時は、思わず頬の肉が緩んでしまった。

女性が美しく見える三大シチュエーションは「夜目、遠目、笠の内」であるが、四番目に加えるとすれば、絶対に「洗い髪」ではないかと思う。濡れた黒髪からほんのりと香ばしい香りが漂う場面設定には、大抵の男はまいってしまう。

しかし香りの元をたどって行ったところでネコのションベンが出てきたのでは、せっかくの美女も台無しである。今回の「ASIENCE」の秘密は出来るだけ思い出さないでおくことにしよう。

医療の現場で使われている薬剤にも、尿から抽出されたスゴイものがある。「ミラクリッド」という注射薬がそれで、名前の通り「奇跡」の薬である。急性膵炎発症時にはトリプシンや好中球エステラーゼ等のタンパク分解酵素を阻害して病状を抑え、細菌性ショックや出血性ショックの発症時にはライソゾーム膜を安定させショックを和らげる働きがある。一般名を「ウリナスタチン」といい、尿 (Urine) 由来の名が付けられている。面白いことに開発当初は自衛隊員たちの尿が使われていたらしい。国を守る自衛隊員たちの尿が、われわれの体も守ってくれる。これも最初知った時には「えっ」と思った。今もそうなのかと思い製薬会社に問い合わせ



心カテ風景 (作者: 長田信洋)

てみたら意外やこれが、現在は中国の人たちの尿を使用しているとの返事が帰ってきた。「尖閣諸島」の領有権問題でもめている相手の尿から精製した薬だ。医学的には何の問題もないはずだが、気持ちの面ではちょっとイヤだ。細菌やウイルスの検査および処理もきちんとしており、感染予防面でも初期の頃のものより安全とのこと。しかし“防空識別圏”を突然主張してアジアの安全を脅かすような国である。尿の安全性もほんとに大丈夫か？とついツッコミを入れたくなる。

まあまあ、議論は尽きないと思うからこの話は一応ここで区切りをつけよう。

猫尿シャンプーは香りで気分を落ち着かせ、中国尿薬のウリナスタチンは気分はともかく、体の中の炎症反応を落ち着かせてくれる。

ちょっとレベルの低い話になるが、寒い日の朝のトイレでは、立ちション時に体の芯がブルッときて気持ちがスーッと落ち着く幸福な瞬間がある。小学生以上の男子なら誰でも経験している感覚だが、男子とは違って尿の通り道が肝心なところで途切れた形になっている女子にはこの感覚がないらしい。この幸福感もシャンプーや薬剤同様、U液（尿）が人にもたらす不思議なはたらきと言えるだろうが、女子には納得できないでしょうね。



心臓外科医の手（作者：長田信洋）

お知らせ

公開シンポジウム『倫理が育む健康・福祉に貢献する研究』開催要領

1. 目的
研究者及び一般市民を対象に、研究における倫理の重要性の認識を深めるとともに最先端研究の紹介を通じて国際的に卓越した科学技術に関する教育研究の推進を図る。また、文部科学省大学間連携共同教育推進事業「研究者育成の為に行動規範教育の標準化と教育システムの全国展開（略称 CITI Japan プロジェクト）」の周知徹底及び同事業で作成した研究者の行動規範に係る標準教材の全国展開を図る。
2. 開催日時及び場所
2014年3月8日（土）13:00～15:30 沖縄科学技術大学院大学 講堂
3. 主催：沖縄科学技術大学院大学、CITI Japan プロジェクト
4. 共催：琉球大学、沖縄工業高等専門学校
5. 後援：内閣府沖縄総合事務局、沖縄県、沖縄県医師会、独立行政法人日本学術振興会、独立行政法人科学技術振興機構、株式会社琉球新報社、株式会社沖縄タイムス社
6. 対象：学生、研究者及び一般市民（約 500 名）
7. 参加費：無料
8. 内容：<https://groups.oist.jp/ja/ethics>
 - 13:00～13:10 主催者あいさつ：
 ジョナサン・ドーファン（沖縄科学技術大学院大学学長）
 福嶋 義光（信州大学医学部長、CITI Japanプロジェクト事業統括）
 - 13:10～13:15 来賓あいさつ：文部科学省高等教育局
 - 13:15～13:35 倫理が育む健康と福祉への研究の貢献
 メロディ・H・リン（米国保健福祉省被験者保護局副局長）
 - 13:35～13:55 研究者の行動規範に関する国際標準教育を目指すCITIプロジェクト
 市川家國（信州大学医学部特任教授、バンダービルト大学教授）
 - 13:55～14:10 休憩
 - 14:10～14:35 ADHDの理解と管理～研究の貢献
 ゲイル・トリップ（沖縄科学技術大学院大学教授）
 - 14:35～15:00 脳科学に基づいた脳神経外科学教室の発展をめざして
 石内勝吾（琉球大学大学院医学研究科脳神経外科 副医学部長脳神経外科主任教授）
 - 15:00～15:25 iPS細胞を用いた神経難病の研究
 井上 治久（京都大学 iPS 細胞研究所 准教授）
 - 15:25～15:30 質疑応答
 ＊同時通訳あり（日本語及び英語）
9. 申込み：下記ウェブサイトから。平成26年2月末まで（申込み多数の場合、先着順）
<https://groups.oist.jp/ja/ethics/ethics-2014-participation-form>

本件に関する問い合わせ先
 〒904-0495 沖縄県国頭郡恩納村谷茶1919-1
 沖縄科学技術大学院大学研究安全セクション 川野貴子
 電話：098-966-2291（午前10時～午後4時、土日除く。）
 電子メール：research_safety@oist.jp

